



新しい「日本デンマーク」目指して

近藤 牧雄

私の農業への生い立ち

戦時中に生まれ、長男のため小さい頃から家業を継ぎ「農業をやれ」と云われ育ち農林高校へ進学。さらに県種鶏場で鶏の専門知識の勉強。そして養鶏家になるが、経済の優等生にはついていけず5,000羽を維持。昭和46年パイロット事業のはしりです、農協からオペレータになるよう誘われ稲作農家に転身。農閑期を利用し苺も作るが性に合わず計画的に作れるミツバに切替。雇用中心の多角経営農業を始める。

らしからぬ農民

30年前、友人から「これからは農企業の時代になる」と知らされ、JAの営農部会の活動より、青年実業家の集まりである青年会議所に入りすることが多くなり先輩から経営方法を学び、農業技術と合体させた。研究費という名で、新しい作物、新しい技術を導入「失敗を恐れず挑戦！」開拓を試みることに胸が騒ぐ農民となる。

最近思うこと

10年前「どしゃ降りの雨 美田が水庫となり 人を助け」と新幹線三河安城駅前開発で自分の田んぼがつぶされアスファルトジャングルになるのを阻止して詠んだ標語が全国農業新聞で入選し水田の重要さ、環境の大切さを訴えたことが、今、まさによみがえってきて私を奮起させることがある。それは、地球にやさしい環境を考えた作物を作ることとお客様（消費者）と直接会話のできるチャンスを作ることです。

失敗を糧に次のアイデア……

三河地どりの生産を失敗した鶏舎と敷地を

利用し、環境にやさしい炭焼きをしよう一念発起。そこで青年会議所が立ち上げた「安城まちづくり市民会議」に「農から安城のまちを考える」を提案し、環境委員会 地球環境小委員会 森づくり・河川浄化委員の有志で炭焼き窯を作り場所と施設の提供。

農業の大切さ、安全な農産物の生産と同時に環境に配慮した作物作りを話し合う農家と非農家の人的な交流広場にも活用する。

環境 農業 経営

「炭焼きは地球を救う」をスローガンに「市民炭焼き塾」を開き、環境問題を考え行動する活動の輪を広げながら、天下の楽しみの炭焼きを通し、炭焼き・火の文化を伝え仲間づくりをする。循環型社会を炭焼きで実証するため、街路樹や梨等の剪定枝、安城七夕祭りで使用済みの竹を炭にし、資源として活用する。

炭を農業に取り入れ日本デンマーク復興を目指し、そして農業の持つ多機能性を市民にアピールする。炭を土壤改良材として土に戻し、二酸化炭素削減に役立て地球温暖化対策にする。

農業経営は先ず、お客様が求めている農産物を作るのが鉄則。私は少し高価でも・安全・美味しい・新鮮・で更に、環境に配慮し元気に育った農産物であれば売れると信じている。また、竹炭・木炭・竹・木酢液としても直接販売をするが、炭焼き技術を磨き備長炭や炭工芸品としてもそこに置くだけで空気清浄や脱臭をして皆さんの目を楽しませる作品も生産販売したい。

まとめ

農薬と化学肥料・科学技術に頼り、他国農業と張り合う農業は止めて、環境にやさしい農業を日本はやるべきだと思います。日本古来から有る循環型農業をもう一度見直し自然農法は少し金と労力がかかるが、それをお客様（消費者）に理解して、買ってもらう努力を農民（生産者）はすべきだと思います。それには生産者とお客様が顔の見える関係で居たいものです。さあ「市民炭焼き塾」を通して環境と経営を両立するため頑張るゾ！

（愛知県安城市・農業）